

第 3 号



コハクチョウ

ガンカモの仲間で、日本へは秋に渡ってくる冬鳥です。よく似た鳥にオオハクチョウがいますが、コハクチョウは嘴の黄色部がより小さいのが特徴です。越冬地として滋賀県の琵琶湖や島根県の中海などが知られていますが、福井県ではその渡りの途中に観察されます。水鳥で有名な三国町の大堤おおづみでは、例年11月10日ごろに飛来し1週間ほど滞在しています。(1990年11月14日撮影)



福井県自然保護センター

ムササビの形態と生態

自然保護センター 大迫義人

皆さんはムササビという動物を知っていますか。見たことはなくても名前ぐらいは知っていることだと思います。それでは、ムササビについてどれくらい知っているのでしょうか。いきなり質問です。正解は最後に書いてあります。

ムササビクイズ

1. ムササビは大きく分類すると何の仲間でしょう？ a.ネズミ b.ウサギ c.モグラ
2. ムササビは小さく分類すると何の仲間でしょう？ a.ネズミ b.リス c.ヤマネ
3. ムササビの前歯(門歯)は上下合わせて何本でしょう？ a.4本 b.8本 c.12本
4. ムササビの体重はどれくらいでしょう？
a.0.5~1.0kg b.2.0~3.0kg c.5.0~6.0kg
5. ムササビは飛ぶために何が発達しているのでしょうか？ a.翼 b.飛膜 c.羽根
6. ムササビは最高何mぐらい飛べるのでしょうか？ a.50m b.100m c.200m
7. ムササビは何を食べているのでしょうか？
a.木の芽、花や果実 b.鳥やけもの c.昆虫類
8. ムササビはどんなふんをするのでしょうか？

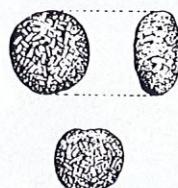
a.



b.



c.



(晶文社 アニマルウォッチング)

9. ムササビの出産時期はいつでしょう？
a.初春の年1回 b.初夏の年1回 c.初春と初夏の年2回
10. ムササビは何頭子どもを生むでしょう？ a.1~2頭 b.3~4頭 c.5~6頭
11. ムササビの子育てはどちらの親が行なうでしょう？ a.オス親 b.メス親 c.両親
12. ムササビは繁殖期を除いてどんな社会で生活しているでしょう？
a.単独 b.家族 c.群れ

ムササビは、哺乳綱、げっ歯目、リス科に属する動物です。哺乳類については、皆さんどんな動物かわかると思いますが、げっ歯類というのは、かじるための歯を持つ仲間という意味で、代表的な動物はネズミ類です。ウサギもかじる歯を持っていますが、上顎の歯が二重構造になっているためネズミ目から分けられ、独立の兔目になっています。ちなみにモグラはミミズなどの虫を食べるという意味で食虫目といいます。そしてげっ歯目には、ネズミ科、リス科、ヤマネ科があります。

ムササビは、朝鮮半島から中国南部と日本の本州、四国、九州の広葉樹林帯に分布しています。北海道には、ムササビは分布せず、代わって同じ仲間のエゾモモンガが生息しています。ムササビが生活するためには、滑空するための10m以上の大木、巣の場所としての樹洞や人家、そして巣材として多量のスギの皮を必要とします。ですから、このような条件がそろった神社や寺院の境内にも棲んでいます。案外近くにいても、夜行性ですから皆さんは気づいていないかもしれませんね。

普通のリスは空を飛ぶことができませんが、知ってのとおりムササビは空を滑空できます。それでムササビの仲間のことを英語で Flying squirrel (空飛ぶリス) といいます。体の大きさの割には軽くできていて0.5~1.0kgほどの体重です。空を飛ぶ時は、前足と後足の間にある皮膚の膜（飛膜という）を一杯に広げ、尾でかじをとりながらグライダーのように滑空します。なんと最長200mも飛べるそうです。

物をかじるための歯ですが、右図のように前歯（正確には門歯といいます）と奥歯（正確には臼歯といいます）の間に歯がなくすきまでできています。これを歯隙といい、この空間に食べ物を蓄えることができます。リスが木の実で頬を一杯しているのを見たことはありませんか。門歯は上下2本ずつの計4本あり、のみのように鋭くなっています。門歯は、一生涯伸び続けますから物をかじっては短くしているのです。

森で生活しているムササビの主な餌は、サクラ、ツバキ、モミジなどの木の新芽、葉、花とシイ、カシ、クルミ、カキなどの果実です。あの油臭いスギやヒノキの若葉なども食べます。実は、植物以外にもセミや甲虫、小鳥の卵なども時に食べますので、問7は厳密に考えますとすべて正解になりますね。ちなみに右図はムササビの食痕で、食べた枝の切口がナイフで切り落としたように鋭くなっていたり、食べ残した葉にV字型の歯跡が残っていました。ふんは黒くて丸く、正露丸のような形をしています。樹上からふんをしますから、地上にバラバラとおちていてなかなか気づきにくいものです。

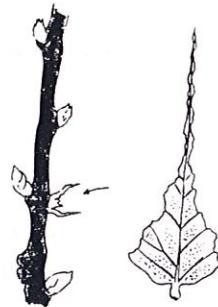
ムササビの出産時期は、本によっては年1回、5~7月頃と書いてありますが、福井県では3月と7月の記録がありますので年2回の出産時期があると考えられます。妊娠期間は2ヶ月強ですので、交尾期は1月と5月頃になります。この時期に林の中からグルルーとか、ギャー、キヨロロなどの声が聞こえてきます。これは交尾騒動といってオスどうしがメスをめぐって取り合いをやっているのです。ネズミ類は数頭の子どもを生みますが、ムササビは1~2頭と少ないです。これは、空を飛んだり木をよじ登ったりという、特殊な生活をしなくてはなりませんので、1人立ちさせるまでに長くかつ多くの親による世話を必要です。すると子どもが多いと完全に育て上げることが難しくなります。少なく生んで大きく育てるのがムササビの繁殖戦略です。

大阪市立大学の川道先生という方が奈良公園でムササビの社会を研究されています。先生の観察によると、メスはお互いにきっちりとしたなわばりを持っており、侵入があると激しく追い払うそうです。そしてオスどうしにはなわばりが認められず、いくつかのメスのなわばりを含む行動圏を持っているそうです。哺乳類は、その名のとおり授乳という行為があるため、子育てはメス親のみで行なうものがほとんどです。ですから子育て時期を除いてムササビの社会は単独生活といえます。なおさらその存在を皆さんに気づかないかもしれませんね。

ムササビのことについては、まだまだわからないことばかりです。皆さんの近所にムササビが棲んでいたら観察してみて下さい。新しいことを発見できるかもしれませんよ。
(正解: 1-a, 2-b, 3-a, 4-a, 5-b, 6-c, 7-a,b,c, 8-b, 9-c, 10-a, 11-b, 12-a)



ムササビの頭骨(小学館 日本の動物)



ムササビの食痕
(晶文社 アニマルウォッチング)

ムササビのムサシ

自然保護センター 大迫義人

8月9日、鯖江市にあります西山動物園のNさんより、ムササビの赤ちゃんを預かっているとの電話がありました。聞きますと、福井市二上町のKさん宅の屋根裏にあったムササビの巣を取りおろしたところ、赤ちゃんがいたので2、3日前に動物園へ持ち込まれたそうです。ネズミやモグラ以外は保護獣ですので、飼育する場合は許可が必要です。そこで自然保護センターで引き取ることにしました。

動物園へうかがうと、小さな箱の中にまだろくに目も開いていない、ほんとの赤ちゃんムササビが丸くなっています。8月5日に親から離され7日に牛乳を少量飲んだだけだそうですから、かなりお腹をすかしているはずです。Nさんが人間用のミルクを5ccほど与えていました。その時の体重は175gありました。生まれたてのムササビは体重が25g程度で、生後1カ月半は目を閉じているそうですから、このムササビ君、7月初めに生まれたのでしょうか。オスのムササビだからムサシと名付けました。

さて、このムサシの親を私がやらなくてはならなくなりました。実は、一度若いムササビを預かって飼育したことはあるのですが、こんな乳飲み子は初めてです。少し不安です。動物園のNさんに飼育の注意事項をアドバイスしていただき、自然保護センターへ持ち帰りました。

大学院時代の私の先生がムササビの研究をなさっており、うかがったところ、子どもへ



は無調整の牛乳を与えるとよく、お腹をこわしたら人間用の整腸剤であるビオフェルミンを使うといふことを聞きました。—これで何とかいけるぞ—人間用の哺乳びんでは、ムササビには大きすぎます。初めはスポットでミルクを与えていましたが、ペットブームの昨今、なんとネコ用の哺乳びんが市販されていました。大きさがちょうどムササビにあっています。あまり元気のなかった最初の頃と違って、今ではいっきに20ccも飲むようになりました。

二人の先生に従って人間用ミルクと牛乳を半々混ぜて与えています。たまに整腸用にプレーンヨーグルトを1さじ混ぜています。心配されていたミルクの成分の違いからくる下痢も起ららず今のところすくすくと大きくなっています。

ミルクを飲んだ後は、オシッコとウンチを出してやります。野生ではメス親が子どものおしりをなめてやるそうです。ティシュペーパーでムサシのおしりをさすってやるとすぐにオシッコを出しました。おとなしくふんばっていると思ったら、今度は白っぽいウンチが出てきました。食事、トイレが終わったらすぐにスヤスヤと寝息をたてて寝てしましました。ムサシのおかげで休日も夜中もなくなってしまいましたが、このカワイイ寝顔を見ると—お父さんがんばらなくっちゃー。

自然保護センターの周辺は、森林に囲まれています。今「自然観察の森」という野鳥やリス、ムササビの棲める森を整備しています。来年の春までにはムササビの巣箱のついた自然観察棟が完成するでしょうから、その時、ムサシを森に返してやろうと思っています。

秋の星話

自然保護センター 大沢 安一

どういうわけか星座にまつわる神話は華々しいところもある反面、最後は悲劇で終わるものが多いようです。たとえば、自分が愛した狩りの女神アルテミスに弓で殺されてしまう狩人オリオン。たくさんの冒險をしたにもかかわらず、最後は妻の嫉妬のために自殺せざるを得なくなったヘルクレス。この他にもこと座、おおぐま・こぐま座、こいぬ座、おとめ座、いて座なども悲しい結末で終わってしまいます。ギリシャ神話を作った人々は悲劇が好きだったのでしょうか。

しかし、秋の夜空を飾る星座にまつわる話は、ハッピーエンドで終わる数少ないもので、おまけにペルセウス座、アンドロメダ座、カシオペヤ座、ケフェウス座、ペガスス座、くじら座と秋の星座が勢揃いしてきます。では、この物語を簡単に紹介しましょう。

アルゴス国王のアクリシオスはいつか自分の子供に殺されるという予言を受けます。そこで、アクリシオスは王妃ダナエに子供ができないよう青銅の部屋に閉じ込めますが、大神ゼウスは黄金の雨となってしのびこみます。やがて、ダナエはひとりの男の子を生みます。この男の子が、ペルセウスです。これを知ったアクリシオスはダナエとペルセウスを小さな木箱に閉じ込め、海に放り投げてしまいました。

セリフォス島に打ち上げられたペルセウスは無事成長しますが、島の国王にゴルゴン・メデューサを退治するよう命じられます。メデューサは、髪の毛の1本1本がへびという怪物で、目と目が会うと石になってしまうのです。ヘルメスと女神アテナの力を借りペルセウスは無事メデューサを退治します。このときメデューサの血から生まれてきたのが天馬ペガスです。

帰り道エチオピアに立ち寄ったペルセウスは、鎖につながれたエチオピアの王妃アンドロメダに出会います。アンドロメダは国王ケフェウスと王妃カシオペヤの一人娘です。カシオペヤが自分の娘をあまりに自慢しすぎたために、アンドロメダは化けくじらティアマトのいけにえにされてしまったのです。これを見たペルセウスは袋からメデューサの首を取りだし、化けくじらを石にしてしまったのです。こうしてペルセウスはアンドロメダを救い、ふたりは結婚したのです。

後にペルセウスは競技会で円盤投げをしますが、このとき投げた円盤が誤って観客の中に飛び込み、ひとりの老人が死んでしまいます。この老人がアルゴス国王のアクリシオスだったのです。こうして神の予言は、その通りに実行されたのです。

ただ、秋の星座の中には明るい星が少ないので、星座を探すのにはちょっと苦労しますが、こんな話を思い浮かべながら星座を眺めるのも楽しいものです。



森 林 の 土 と 水

自然保護センター 白崎 良昭

最近、ランを、ある土で植え替えたところ、鉢の中で水が滞留してすぐに葉先が枯れこんできた。どうしてかと思って鉢の中を見ると、根がくさり始めていた。これは、根が水に浸され酸素の供給が断たれたためで、そのため十分な酸素が供給されず葉先も枯れたようである。そこで、鉢の中の土を石ころにかえたところ、根が空気にふれることができ極端な先枯れは少なくなった。

ただ植物は、種類により根が酸素を必要とする度合いを異にし、ラン科の植物は特に多く必要とするが、イネは水中で長期間生育する、などということがある。根ぐされの対策例としては、畑で高いうねを作つて作物を栽培することや、庭師が植木を高植えにすることなどたくさんあるし、山では春ランの根は、落葉を取り除くと、地表にはうようにしているのが見られる。このように植物は、土中にふくまれる水だけでなく酸素も必要とする。人工的に栽培するランの場合、石ころでは保水力はないけれども、人為的に水をやることができるので、酸素の供給の面から考えると都合がよいのである。

では、自然界の森林ではどうなのだろうか。森林はよく水を蓄えるというが、それは土中にである。その水を蓄える土は、樹木によって作られ、樹木がなくなることによって衰えたりする。山で種子から発芽した植物や苗で植えられた樹木は、土中の条件が適しないところへは根が伸びていかないで、それまでに伸長した樹木の先端や枝先が枯れしていくことはないわけであるが、根が伸びられない場合、それからあとの正常な成長は期待されない。

樹木が生育するための土のそなえるべき条件はいろいろあるが、森林の理想状態である極盛相の継続してきたところでは、生立する樹木にとってすべての条件が満たされている。そのような森林の土は団粒土とよばれる土層をもっている。

この団粒土についての1記述を紹介すると、NHKの講座で岩田進午講師の話を聞いたある畜産家が、ほうぼう堀りまくってこの団粒土を捜し当て牛舎の床に敷いたところ、排水も非常によく、また牛がそれを食べて、とても元気になった、ということを氏の著書に記されていた。

ところで、団粒とはミミズによって排出された直径0.1~2mm位の粘土とある程度分解された有機物が混じった粒であり、大小の間隙が発達している。このため、粘土で構成されている団粒土は、よく水を吸収する。さらに団粒土の間隙はよく発達しているので、その層が厚い森林では、雨水の大部分は、団粒と団粒のすきまや団粒のかたまりの間の大きな孔隙を透過し、ある速度で下方に通過する。この速度は、土が発達していない斜面の固い地表を流下する速度に比べると、かなりゆっくりしていて、時間を経て川などに湧出する。このため、保水能力がすぐれている。また、この団粒を作る粘土粒子の一粒一粒は、ある種の有機物でのりづけされているので、乾燥浸水によってばらばらになることはなく、ミミズの通ったあとは大きな孔隙となる。したがって、排水性能にもすぐれている。以上のことから、団粒土は「水はけがよくて水もちのよい土」といわれている。

一般に正常に生育している森林では、ミミズが落葉などのある程度分解の進んだ有機物を土中にひっぱりこみ、土と一緒に食べて地表に排出して盛り上げるので土が耕転されることとなり、団粒土は厚く発達することができる。こうして落葉などは、土中に順次引き入れられ、分解が進むと根に吸収され、樹体の構成に関与するという循環を繰り返すので

あるが、いくつかの条件が同時に満たされ一定量以上の養分がそのサイクル中を移動しつづけるとき、土はプラス方向の発達をする。天然林ならば、極盛相にいたって、土もやはり最も発達して安定するはずである。

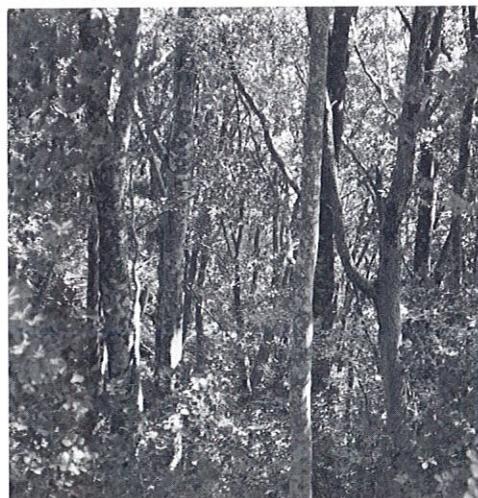
逆に、先ほどの糊のはたらきをしている物質は、土中の他の物質が不足すると微生物が餌として分解するので、土地に常に養分が補給されていないと団粒はこわれてしまう。こうして、その土の持つ排水性能は、低下してしまうのである。

また、寒冷地の人工林の場合など、植栽樹種が適合しないと、生育が思わしくない場合がある。天然林を人工林に更新して苗木を植えたとすると、苗はすでにあった土中養分を吸収して成長し、通常は壯齡にいたれば自らの力で成長するようになるが、場合により、幼齢時などに元の養分が枯渇すると、土の状態も劣化して生育がぶるも、未だその樹木からは、養分の返還が始まらず、樹木は永年休眠状態におちいる、ということがある。ただし、成熟した人工林では、極盛相にいたった天然林と同様に土が発達していると思われるが、森林の水分関係能力について天然林と人工林の優劣の断定はされたことがないようである。

また、森林を見て樹木が枯れたことがないから、森林の土には、十分水が蓄えられていると考えるかも知れないが、土の発達していないところの樹木でも、非常に強い力でもって、粘土の中の水でも吸いあげるので、容易には枯れない。そのようであるから、単に木が生きているからといって、その森林に十分貯水能力があるとはいえないのである。

以上のことまとめると、土のあるときの能力は、植物、土、動物、微生物、水、空気などで構成される森林が、物質循環を繰り返して、その時点で蓄積している力であるといえる。森林はこの力と樹木の活力が旺盛でなければ、酸素の供給や水質の保持及び水の貯留機能は十分発揮されないとということである。

なお誤解のないように、人工林について、一般に不合理なものであるといっているのではないことをつけ加えておきます。



写真右は推定35年生スギ林であるが、普通15年生位の大きさである。写真左は、右写真スギ林下方に隣接するブナの2次林で右のスギと同齢と推定される。

タイムスリップ

自然保護センター 松村俊幸

学生時代、北海道の道東地方の自然に憧れ、何度も足を運んだ。あれは何度目の北海道行だったろう。私は釧路湿原を上から見たくて、ある丘の上に立っていた。そこには、湿原の中を蛇行して流れる釧路川があった。昔の川の流れ跡、三日月湖も見える。小学校のとき社会の教科書で見た写真そのままの自然が、そこに広がっていた。

「これが見たかったのだ！」「なぜ？」「福井ではもう見ることができない本物の川。」「九頭竜川も坂井平野もこんなだったか。」私は子供のころ刈込池のブナの原生林を見て以来、常に太古の自然に憧れていた。だから私が坂井平野の自然を考えるとき、今の自然では満足せず、山頂から蛇行する九頭竜川を見ながら、いつもタイムスリップする。

九頭竜川。この福井県最大の河川も、かつては何本もの枝川に分かれ、坂井平野一帯を思う存分流れていた。センターの展示「九頭竜川と坂井平野」で太古の九頭竜川の流れを復元しようと取材したとき、坂井平野の至る所に旧河道や自然堤防、そして木部輪中や芦原干渉、川西干渉などの低湿地帯があったのを知り、確実に夢は広がっていた。

専門家の方の推定によると、現在の坂井平野が形成されたのは弥生時代だそうだ。その頃坂井平野では、やっと稲作が行なわれ始めたのだろうか。人々は比較的水はけのよい湿地を水田へと変えていったのだろうか。しかしその面積はわずかで、辺りは一面、アシやマコモ、そしてハンノキがパッチ状に生えている湿地だったろう。また小高い丘には、クヌギやコナラの落葉広葉樹林や、タブやスダジイの薄暗い森が続いていたはずだ。

動物は、それらの湿原や森を住みかとしてかなりの種類が生息していた。ニホンオオカミ・ツキノワグマ・ホンシュウジカ・ニホンイノシシなどの中大型哺乳類がいたんだろうし、トキ・コウノトリ・ミサゴ（魚を食べるタカ）などが丘の木で子育てしたはずだ。広大なアシ原には、チュウヒ（タカの一種）も繁殖していただろう。冬になれば、大陸からコハクチョウ・ヒシクイ・マガン・カモ類などの水鳥が万単位でわたってきた。そして万単位の水鳥の群れに突っ込むオジロワシ・オオワシ・オオタカ・ハヤブサのハンティングが見れたろう。当然小動物も豊富だったはずだ。九頭竜川から分離された三日月湖には、メダカ・フナ・タナゴ類などの魚が群れをなして泳いでいただろうし、ゲンゴロウ・タガメ・ギンヤンマなどの昆虫も数多く生息していたはずだ。九頭竜川には、春、サクラマスやアユが大群で遡上し、これらは人々の重要なタンパク源になったのだろうか。今はもう日本全国どこへ行っても見ることのできない自然が広がっていたはずだ。

ところで、当時の人々は弥生時代の遺物である銅鐸の表面に、動物や昆虫の絵を描き、日本列島を秋津島（アキツとはトンボの古い呼び名）と呼んでいた。神武天皇が大和の山なみを「あきつのとなめ（トンボの連結）せるがごとし」と、詠むなど、稻を食べる昆虫を捕食するトンボに十分関心を持っていたことを意味する資料が残っている。



チョウトンボ

トンボ・タガメ・ゲンゴロウなどの水生昆虫、そしてガンやカモなどの水鳥は、豊富な水生植物と共に浅くて開けた水面が必要である。このような環境は、人間が稲作をするこ

とによって確実に増加したはずだ。通常浅い開水面は数年で背の高い生物に被われ、洪水で破壊されない限り水生生物の生息に不適な環境になってしまう。人間はこのような遷移を稲作によって停止させ、結果的にガンやカモなどの水鳥の生活場所を提供し、水生昆虫などの水生生物たちが繁栄を極めたのではなかろうか。実際、現在私がフィールドとしている敦賀市樺曲地区の池見湿地で、地元の人が水田耕作を中止した後、オオコオイムシ・クロゲンゴロウ・デンジソウ・タヌキモなどの水生生物が豊富になったが、背丈の高い植物の侵入と水生植物の繁りすぎによって、これらの生物が消えていくのを確認している。

とにかく弥生時代以後、人間活動は急激に増大し、それに伴う環境の変化によって水生生物は繁栄したはずだ。しかし一方で、大型動物などは次々に姿を消していったらう。ニホンオオカミ・ホンシュウジカ・ツキノワグマなどが、坂井平野から山地帯へと追いやられたのはいつのことだろう。そしてニホンオオカミは明治時代には山地帯からも、ついには日本からも姿を消してしまった。嶺北地方では、ホンシュウジカももういない。ニホンザルも群れではほとんど見られない。鳥も同じだ。トキやコウノトリは、野生ではすでに日本から絶滅した。このままの環境変化が続けば、ヒシクイやマガソなどの水鳥も、福井そして日本から、絶滅していくであろう。

かつて稲作農耕によって繁栄した小型の水生生物と、現在の農業の変化についていけず、絶滅という同様の道を歩み始めている。戦後の農薬万能時代に激減し、湿田を乾田に変え、小川をコンクリート性の用水路に変える圃場整備によって、とどめを刺されようとしているのだ。この小川の用水路化は、現在次第に検討されてきた農薬の低毒化や低量化が進んでも、水生生物の生息の大きなネックとなるであろう。

しかし今、バードサンクチュアリやトンボ公園の造成が、全国的にブームになっている。このような公園でしかこれらの生物が見られなくなる時代が来て欲しくはないが、種の絶滅だけはいくらか防げることを祈っている。

最後に愛知から福井に転勤してこられたあるトンボ研究者の言葉を付け加えておこう。「愛知から福井にくる時、きっと身近でトンボが見れると期待してきました。しかし福井の自然に触れるに従って、この考えが間違いであることに気がつきました。福井の水辺は、どこへ行っても完璧なまで圃場整備が



タガメ

進み、コンクリートで固められた用水路しかありません。愛知よりひどい状況です。」

今年から自然保護センターでは、これらの水生生物の中からもうほとんど見られなくなってしまったゲンゴロウとタガメの飼育を始めました。人工的に増殖し、近い将来このような公園ができた時、自然の中にもう一度戻したいという願いからです。

これらの成果については、機会を見て「本誌」に発表していくつもりです。

ナチュラリスト通信

行事報告

ナチュラリストリーダー養成講習会



8月11日(日)、自然保護センターでナチュラリストリーダー養成講習会が行なわれ、40名の方が参加されました。この講習会は、自然観察会のリーダーを養成するため、ナチュラリストリーダーに登録されている人やリーダーをめざす人を対象に、毎年自然保護センターの主催で開かれるものです。2回目を迎える今回の講習会は、日本自然保護協会の普及委員として活躍中の植原彰先生（山梨県在住）をお招きして、「自然観察の指導法」をテーマに行なわれました。午前中は講義、午後は自然観察の森で野外実習を行ないました。以下に野外実習で植原先生が指導されたネイチャーゲームを紹介します。皆さんも野外に出た時に一度やってみてください。

【テレパシー】初めて出会う人と仲よくなれるゲーム

二人一組になって、同じ方向の景色を1分間見ます。その間、一人は見えるものをできるだけ覚え、もう一人は、問題を考えます。1分間たつたら、向き合って問題を出します。二人が見たものが同じであれば正答率が高くなるゲームです。



【音いくつ】自然の静寂さに気づかせるゲーム
手を広げて両手を上げ、目をつぶります。違った音が聞こえたら指を折って数えていきます。

鳥の声や風の音など自然の中にある音をだれがたくさん発見できるかというゲームです。



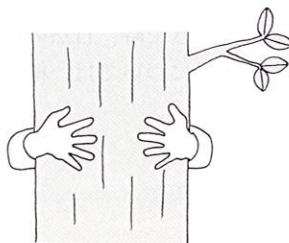
【サウンドマップ】聴覚をとぎますゲーム

厚紙のカード（B6サイズぐらい）の中心に×印を打ち、そこを自分のいる場所とします。音を聞いたら、その音をうまく表す記号を方向と距離を考えてカードに記入します。5~10分したら集まって、お互いのカードを見ながら話します。



【わたしの木】触覚と臭覚をたよりに木を探すゲーム

二人一組みになって一人は目かくしをします。もう一人は目かくした相手を周辺にある自分の気に入った木まで連れていきます。このときまっすぐに行かずにまわり道しながら行きます。（ゲームを盛り上げるために仮想の倒木をまたいだり、ちょっとしたやぶをくぐらせます。）木に着いたら、手でさわらせたり、においをかがせたりして木の特徴を覚えさせます。同じ道を通って元の場所まで帰ったら、目かくしをはずし木を探させます。



ブナ林の生き物たち(6/9)

県内でも有数のブナの原生林が広がる大野市上小池の刈込池周辺で開催しました。

今年は残雪が遅くまであったため、モリアオガエルの産卵やエゾイトトンボの可憐な姿を観察するには少し早すぎました。しかし、傷ついたニホンカモシカや、トンボの羽化を間近で観察することができました。しかも、昨年ブナの実が豊作だったため、ちょうど芽生えを至る所で見付けることができ、ブナの林の生態について観察することができました。

ブナ林の豊かさを満喫できた1日でした。



池ヶ原湿原の昆虫を見よう。(7/28)

観測史上2番目といわれた長梅雨のため、当人は思わず梅雨空でした。それでも朝には雨が上がっていたので、問い合わせの電話にも「実施します。」と力強く答えた担当者。

ところが、日頃行きの悪い担当者のせいか、挨拶を始めると同時にドシャ降りの雨。全く天を恨みました。(参加者のみなさんすみません。今後精進します。)

ところが観察会は、県外の飛び入り参加の方もあり、熱心な虫好きの子供たちに引っ張られるようにして、雨の中でも熱心に観察していました。ご苦労様。

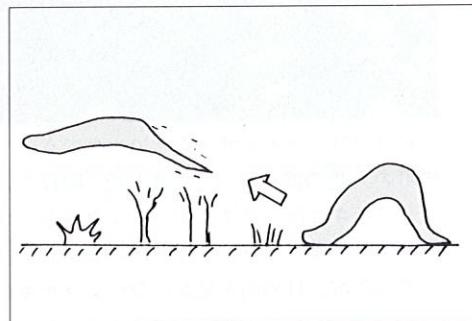


自然情報コーナー

幻のツチノコor珍獣

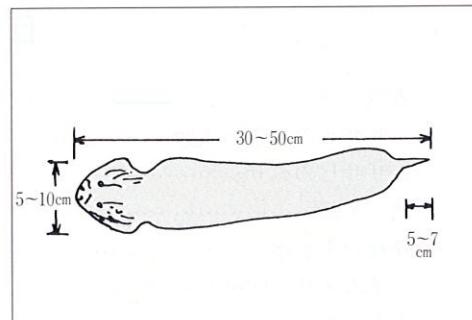
平成3年6月7日(金)、快晴、AM11頃、上中町案賀理地区、イグサの生い茂る草むらで図1のごとく飛んでいく動物を5mほど先で見た。数分後、元の位置に飛ぶ姿も見た。

図1



同日、PM4時頃、今度は草むらを這っていった。刺激をしないように近寄っていくと、図2のごとく私の方に向かっており約3mのところで目と目が合ったが、愛くるしい感じがする目であった。静かにしていると物音一つたてずスゥーとまっすぐに這い進み、草むらのなかに入ってしまい見失った(脚はなかった)。

図2



当地区では昔から「奇妙なヘビ」がおり毒を持っていて危険だから避けて通るようにとの噂が合ったそうである。また、最近では見た人が5人おり、その共通点は①太くて短い②尾は短く細い③色は黒っぽい茶灰色の混色④毛はないなどである。

今や全国各地で懸賞金を提供して探しているツチノコが福井県にも実在していることを目撃したが、それはヘビ類なのかそれともまったく別の種なのかは、今後の課題である。

(福井市 井部 正興)

アカガシラサギが大堤にいた！



8月2日、カモやサギなどの水鳥で有名な三國町の大堤の池へ行ってきました。同行の方に「シラサギには、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アマサギ、カラシラサギがいます」と説明している端、目の前を見かけないシラサギが飛んでいました。水草の上に降り立ったそのサギを見ますと、なんとアカガシラサギ（赤い頭のサギという意味で、決してアカガ・シラサギと読まないように）ではないですか。頭が赤褐色で背中の黒い、まぎれもないアカガシラサギです。以前インドで冬羽のアカガシラサギを見たことはありましたが、夏羽のしかも日本で見たのは初めてのことです。

アカガシラサギは、中国から東南アジアに分布し、ボルネオ、マレー半島まで渡って越冬します。日本では渡りの時期に九州、沖縄地方でまれに見られますが数少ない旅鳥であります。ただし、最近では1981年に熊本県で、1986年に秋田県で繁殖が確認されています。大堤のサギは、もしかすると国内繁殖の個体かもしれませんね。昆虫、エビ、魚などを捕食するそうです。

丹南高校の上木先生にうかがったところ、福井県では1985年に三方五湖の久々子湖での観察があるそうです。6年ぶりの飛来になります。皆さんも「あ～あ、なんだシラサギだ」と通りすぎずに、きっちりと見てみましょう。こんな珍鳥が混ざっているかもしれませんよ。

8月24日には、羽が抜け代わって冬羽に変わりつつありましたが、アカガシラサギはまだ残っていました。いつまで福井県に留まってくれるでしょうか。

（自然保護センター 大迫 義人）

お詫び

森遊第2号の8頁36行目のウスラヤシは、ユスラヤシのまちがいでした。訂正します。

目

次

表紙	1
ムササビの形態と生態	大迫 義人 2
ムササビのムサシ	大迫 義人 4
秋の星話	大沢 安一 5
森林の土と水	白崎 良昭 6
タイムスリップ	松村 俊幸 8
ナチュラリスト通信	10

FUKUI NATURE GUIDE 森遊

<第3号>

発行日 1991年9月30日発行
発行者 福井県自然保護センター
福井県大野市南六呂師169-11-2
〒912-01 ☎0779-67-1655
FAX0779-67-1656
印刷 朝日印刷株式会社